

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年2月21日現在

機関番号：13903

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720173

研究課題名（和文） 小節と二次叙述における叙述構造：位相理論に基づく分析

研究課題名（英文） The Structures of Small Clauses and Secondary Predicates: An Analysis based on Phase Theory

研究代表者

横越 梓 (YOKOGOSHI AZUSA)

名古屋工業大学・工学研究科・准教授

研究者番号：80508391

研究成果の概要（和文）：

本研究では現代英語における小節・二次述語の性質を説明し、さらにそれが歴史的にどのような変化を辿ったのかを明らかにすることで、これまで筆者が行ってきた小節に対する分析との平行性を探った。位相理論において「何が位相を形成するのか」という疑問に対して叙述を伴う構文からのアプローチを試みた。

研究成果の概要（英文）：

This study examined both syntactic and semantic properties of small clauses and secondary predicates in present-day English. By investigating some historical data, we proposed that their structures underwent a syntactic change. Furthermore, the analysis proposed for the structures of small clauses and secondary predicates shed light on the issue "what constitutes a phase."

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
年度			
年度			
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：

## 1. 研究開始当初の背景

いわゆる小節の構造とそれが伴う叙述関係については、独立の叙述理論に基づいて主語と述語がリンクされるという Williams (1980)等の採る見解に対して、Stowell (1981)以来、叙述関係は特定の構造形の下で確立され、小節の主語と述語は単一の構成素を成す

という見解が主流となってきた。Stowell (1981)本来の提案では、叙述関係は述語となる語彙範疇自体の指定部位置を主語となる名詞句が占めることによって確立されるとの分析がなされていたが、その後の研究の進展により、小節の主語はむしろ述語となる句範疇を補部にとる機能範疇の指定部を占め

るとする見解が有力となってきた。このことは、Stowell において範疇横断的に見た指定部と言う X'的な構造的位置に帰せられていた主語という文法機能、あるいはそれ述語との叙述関係が、機能範疇の仲介によって達成される、つまり特定の構造形を形成する役割を含めた機能範疇自体の特性に帰せられるものと見做されることを意味している。このような見解を更に推し進めた分析の1つが Bowers (1993)に見る PrP 分析である。彼は、全ての叙述関係は主語をその指定部、述語をその補部に選択する機能範疇 Pr(edication)の存在によって確立されると主張し、叙述の確立のみを主たる機能とする専用の範疇を仮定した点で、時制や相等本来的には別個の意味機能を有する機能範疇により、付随的に叙述関係の仲介がなされるとする分析とは一線を画するものと言える。この見解の下では、叙述関係を伴うと見做される様々な構文の共通性は、正に Pr という具体的な範疇の存在に集約されることとなる。小節研究の見地からすると、このような叙述理論はそこで得られた様々な経験的・理論的結論から、他の叙述が関与する構文に対して直接的な帰結を導くことを許すだけでなく、逆に他の構文で得られた成果も小節を分析する上での証拠や有益な示唆として参照できることになる。筆者はこれまで小節と呼ばれる構文に対し、最新のミニマリスト理論に基づいて研究を行い、その構造が位相を形成すると主張し統語構造を提案している。その提案がより広い叙述の概念に利用可能なものかどうか検証した。

## 2. 研究の目的

- (1) 最新のミニマリスト・プログラムの理論を生物学的基盤に基づいて研究する。
- (2) 言語理論で扱うべき経験的基盤として、英語における二次述語の統語的・意味的振る舞いを観察し、経験的データを充実させる。
- (3) 位相 (phase) 理論の下で小節・二次述語の性質を捉える。本研究の理論への貢献の可能性を探る。
- (4) 以上の研究に関わる成果を積極的に国内外の学会で発表し、学術誌へ投稿して論文の掲載や研究書・論文集として刊行する。過去の文献データを整理するとともに、調査した記述データや実験データを集積してデータベース化する。

(2)については、これまでの研究で蓄積されている現代英語のデータと歴史的なデータをさらに充実させるべく調査や実験を行う。従来、歴史的データに関して理論的に説明を試みる研究はあまり多くはないが、現代英語における当該構文の統語的分析を提示した上で歴史的なデータを遡り、Yokogoshi (2007)で主張しているように「小節の構造は語彙範疇から機能範疇へと歴史的に変化した」という分析に対して、二次述語の振る舞いがどのように関わるのかを検証することを目的とする。

## 3. 研究の方法

- (1) ミニマリスト・プログラム提唱者である Chomsky (2000, 2001, 2004, 2005, 2006) 及び関連する他のミニマリスト・プログラムに関する文献を読み、その基本的概念、理論装置の仕組みを理解し、言語事実への適用における利点と問題点を、先行研究を検証しながら分析し整理する。
- (2) 調査対象となる具体的な構文である小節・二次述語の言語データを収集する。これまで収集してきたデータに加え、①小節・二

次述語を扱っている未読の論文（ミニマリスト理論に基づいているか否かに関わらず、また統語論的な観点からのアプローチ以外で分析している論文も含める）、②英字新聞や雑誌など、研究書以外の書籍、③既存のコーパスなどを利用し、新たなデータを収集する。

(3) これまでの現代英語における小節の構造についての分析と、二次述語の構造についての分析から、両構文の統語的・意味的特性の共通点・相違点を明らかにし、現代英語における小節と二次述語の構造を提示する。「小節の構造は語彙範疇から機能範疇へと歴史的变化を受けた」という分析から、二次述語が辿ったと思われる歴史的变化を予測し調査する。

(4) コーパスを用いて歴史的データを調査し、データを収集する。検証した歴史的データから、二次述語が現代英語に至るまでどのような特性を持っていたのかを分析する。

(5) 筆者のこれまでの小節に対する分析と二次述語に対する分析について、共時的な観点と通時的な観点からの調査結果をまとめる。ミニマリスト理論の下で、小節と二次述語の構造がどのように説明されるのか検証する。そして「なにが位相を形成するのか」という位相理論の疑問に対する、本研究の考察をまとめる。

#### 4. 研究成果

Chomsky (2000)以降、統語構造の派生は位相 (phase) と呼ばれる範疇を単位として進められるという見解が広く受け入れられており、その少なくとも一部は以前の完全機能複合 (CFC) 等の概念に立脚しているため、主語を備えて叙述関係を確立し、命題を構成する PrP が位相を形成すると考えることは極めて自然に思われる。事実、Bowers (2002) や den Dikken (2006) 等では PrP ないし同じく叙述関係を確立する機能範疇である RP が位相を

形成すると主張されており、小節や二次述語の位相としての地位を検証し、そこに見られる言語現象に妥当な分析を与えることは、言語理論全体の発展に対しても大きく寄与することになると考えられる。とりわけ、位相理論において最大の課題と言えるであろう「何が位相を形成するのか」という疑問に対して、叙述を伴う構文からのアプローチは、単に該当する範疇を記述的に列挙するに留まらず、「何が位相たり得るか」というより深いレベルでの説明を与え得る可能性を開くものである。位相理論の見地からの検証においては、抜き出し可能性や移動可能性、数量詞の作用域や寄生空所など、小節や二次述語を伴う構文について今まで余り注目されてこなかった観点からのデータ採取も行うことになり、それ自体もまた、当該構文及び他の領域の理論研究にとって貴重な貢献をなすものであると考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① Yokogoshi, Azusa. Some Notes on Verb-Particle Combinations, Ivy Never Sere, The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University, 2009, pp.541-553.

② Tanaka, Tomoyuki and Azusa Yokogoshi. The Rise of a Functional Category in Small Clauses, *Studia Linguistica*, 査読有, Vol.64, No.3, pp.239-270.

③ Yokogoshi, Azusa. On Depictive Predicates in English, *New Directions*, 査読無, Vol.28, pp.93-98.

④ Yokogoshi, Azusa. Some Issues on the Head of Small Clauses, 査読無, Vol.29, pp.115-126.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横越 梓 (YOKOGOSHI AZUSA)

名古屋工業大学・工学(系)研究科・准教授

研究者番号：80508391